

# 日本語における名詞の畳語

## —古代語の和語畳語形が表す意味との比較—

清海 節子

### 1. はじめに

本稿では、現代日本語の畳語の意味を十分に理解するために、玉村 (1986) が論じる古代に於ける和語の畳語形の意味を検討する。古代日本語で、名詞が反復した形が何を表したかについて深く知ること、現代語の畳語をよりよく知ることができるはずである。古代日本語の畳語形の特徴から、重要な手掛かりを探すことを目的とする。清海 (2020) では、現代日本語における畳語の意味について、辞書などでの一般的な捉え方と先行研究について検討した。古代日本語と現代日本語に於ける畳語の意味を比較できれば、現代語の畳語形の用法がより明確になるであろう。玉村 (1986) は、古典の代表作品を調査し、古代語における和語の体言(名詞と代名詞)の畳語を扱っている。畳語自体の意味のうち、名詞の畳語形の9割弱に「数」の有標化が認められると述べ、「数」の有標化は畳語の基本機能であったと考えている。この機能を中心に据えて、古代日本語の畳語形について考察し、現代日本語の畳語形の理解を深めていく。

以下、2節では、畳語の定義を示し、清海 (2020) を参考に、辞書及び先行研究から明らかにされた名詞の畳語にかんする意味を確認する。3節では、玉村 (1986) が論じる古代語で体言を語基とする畳語形の研究を取り上げる。古代日本語の畳語形について把握するとともに、現代語との比較もする。4節は、畳語形と類像性について、具体例を挙げながら考察する。5節では、Kiyomi (1993) のデータを用いて、類型論の視点から、日本語における名詞畳語の意味を扱う。6節では全体のまとめと結論が述べられる。

### 2. 現代日本語における名詞の畳語

この節では、最初に、畳語の定義を紹介し、清海 (2020) を参考に、現代日本語における名詞の畳語の

意味にかんする辞書等の調査結果と先行研究を確認する。本稿で検討する畳語は、繰り返される部分(語基)に意味があり、単独で自立して用いられるものに限定する。従って、意味のない要素が反復されている擬音語・擬態語は扱わない。以下、2.1 で畳語の定義を示し、2.2 では、清海 (2020) で観察された要点を概観する。

#### 2.1 畳語の定義

畳語は、英語の'reduplication'に相当すると考える。『英語学用語辞典』(1999)によると、'reduplication'は「重複」であるが、畳語と同等であるとみなす。また、本稿で扱う畳語は、語基全体または、部分が繰り返され、語基の意味が変化するものに限定する。「畳語」には、以下の'reduplication'の定義を用いる(Kiyomi 1995:1145)。

(1) "Given a word with a phonological form X then reduplication refers to XX or xX

(where x is part of X and x can appear either just before X, just after X, or inside X).

Conditions: (i) XX or xX must be semantically related to X.

(ii) XX or xX must be productive."

訳：X という音韻的形式である単語があるとする  
と、XX または xX(xがXの一部であり、xがXの  
すぐ前かXのすぐ後かXの内部に現れる)

条件：(i) XX または xXは、意味的にXに関係  
していなければならない。

(ii) XX または xX は、生産的でなければ  
ならない。

語基は意味があり、畳語と意味の関連性が認められ

るとともに、生産性があるという2つの条件が必要であると定義している。従って、擬音語・擬態語や、生産的でなく化石化した畳語は扱わない。化石化というのは、語基の意味と畳語の意味に関連がないと判断できるか、または、生産的な反復の過程を経た可能性もありながら、現在では非生産的になったと考えられる畳語形を指す。

## 2.2 辞典・先行研究

清海(2020)は、畳語の中で名詞の意味にかんして、一般の辞典を調査したところ、「複数」だけが示されていた。しかし語学専門書・辞典を調べると、「複数」だけでなく、「多様性」の要素が含まれる「多様性の複数」や、「個としての連続」という説明も見つかった。また、畳語が「時を表す副詞」になることも示され、さらに、生産的用法として、[典型的なXの属性をもっている]を表す「XXする」(例:「子供子供した」「女の子の子した」)という構成法も取り上げられていた。古代語の畳語については、「枚挙(..ごとに)」と「総数」があげられていた。本稿では、特に名詞のまま意味変化が生じる「複数」、「多様性」を帯びた「複数」、「総数」などに注目していきたい。

また先行研究の中で、國廣(1980)は、簡潔ではあるが、洞察力のある説明をしていると思われた。日本語は名詞そのもので複数性を表すので、畳語形はそれ以外の何らかの意味があると考えられる。まず第一に、畳語は、「\*三軒の家々」のように、特定の数を伴えないが、「十数人の人々」のように漠然とした数との共起が容認される。「スヴァの町の屋根屋根」は、同じでなく、異なった屋根が並んでいると意識される。また「冬は朝々に見かけた」や、「季節季節に向けた靴下」では、個別性から〈毎…〉という意味が含まれている。そこで、畳語は、〈不特定多数〉と〈個別性〉を表し、さらに〈個別性〉からは、〈すこしずつ異なっている〉と〈毎…〉の意味が帯びることもあると述べている。従って、畳語複数の意味は、〈個別性を保った不特定多数〉であると提言している。

國廣は、さらに、畳語形と頭辞の「諸一」の違い

について論じている。造語法では相補分布を示しており、「\*森の諸木」とは言えないが、「諸問題」が言えることから、「諸一」は漢語のみと結び付き、畳語形は和語が語基の反復ということが分かる。「諸一」と畳語複数は、共通点としては、種類が〈いろいろ〉であることを含意していることであるが、意味の差は、「諸一」は、〈全体をひとまとめにとらえる〉を表すに対して、畳語複数は、種類が〈いろいろ〉であることを含意している点である。つまり、畳語複数は〈個別性〉を、「諸一」は〈ひとまとめ〉を含意する。例えば、「南洋の島島」は、〈不特定多数〉の島であるのに対し、「南洋諸島」は、ある限定された島の群を〈ひとまとめ〉を意味するのである。

ここで、本節の最初で、古代語の畳語の意味に「総数」が示されていたことを思い出してほしい。『日本語学大辞典』(蜂矢, 2018:511)では、名詞の畳語に、「枚挙(..ごとに)」[例「<sup>ヨヒヨヒ</sup>夕々に我が立ち待つに…」(万葉集 2929)]と、「総数」[例「<sup>さき</sup>国々の防人集ひ…」(万葉集 4381)]の二通りの意味が書かれている。現代日本語では、國廣の意見のように、「国々」は、ひとまとまりではなく、〈不特定多数〉の国を表現すると考える方が自然であろう。

また、梅林(2005)は、一般的な畳語形ではない「歌々」について國廣の提言する〈個別性を保った不特定多数〉を用いて論じている。「歌々」が日本語日本文学の分野で少なからず使用されているが、特殊な用法が専門分野では可能になるためには、専門家が不特定多数性と個別性を見極められる専門的能力があるはずである。即ち、専門家は、数十首の万葉集歌を不特定多数の歌としてだけでなく、独立した個別性を考慮に入れる能力も持ち合わせているのである。言い換えると、専門家は、「歌々」を國廣の提言する〈個別性を保った不特定多数〉として捉えることができる。一方、一般人には不特定多数は認識できても、個別性を感知できない。

飯間(2003)は、畳語には、対象となる名詞に偏りがあると指摘している。実際、人間(人々)、植物(木々)、風景(山々)、抽象物(折々)などがあるが、「\*猫々」は言えないのである。その理由は、國廣が提言しているように、畳語が「個別性を保つ

た不特定多数」を表すからであるという。つまり、「山々」は、見渡される連山の中で高い山や低い山など変化に富んだ山一つ一つを示すが、川は見渡せないため「川々」とは言えない。同様に「人々」は、いい人、悪い人、富んだ人、貧しい人など個性のある一人一人を指すが、猫や犬や鳩は、個性が認められないため、多数集まると、一つの集団として捉えられる。そのため「\*猫々」「\*犬々」「\*鳩々」とは言えないのである。

しかしながら、飯間は電子図書館「青空文庫」の作品の中の疊語形名詞を抽出することで興味深い発見をしている。少数ではあるが、普通では疊語にならない「朝々」「穴々」「駅々」「丘々」「教室々々」などが文章の中では自然に使われていた。これらは、文脈で一つ一つを独立的に捉えていると解釈されるからであり、飯間は「山々」は言えるが「猫々」が言えないというのは、程度の問題であると主張している。さらに、「猫々」が自然に受け入れられるための文を作成し、その文脈で猫が独立的に捉えられている。従って、どの名詞でも独立性を表す状況があれば、疊語形が可能なのではないかと推測される。

### 3. 古代日本語における名詞の疊語

玉村 (1986) は、古代語における和語の体言 (名詞と代名詞) の同語反復形である疊語について考察するために、古典の代表作品を調査している。玉村は最初に、多くの言語で、音素、音節、語根、句など言語の諸要素で重複が見られると指摘している。さらに、機能については、数 (複数、多数、総数<sup>1)</sup> など)、アスペクト (継続態、完了態など)、比較 (比較級など)、情態強調 (副詞化) が形成されると述べている。その上で、矢島 (1986) に言及し、新しい観点から世界の諸言語を視野に入れることで、巨視的に言語類型学の研究の枠組みで、重複現象を考察する試みがあることを紹介している。<sup>2)</sup> また、玉村自身も、言語に於ける重複現象の頻度を形態、機能、品詞、語義の点から検討すれば、「疊語 (重複) 率」と呼べるような新しい概念が可能になり、それによって各言語のより厳密な性格付けができるかもし

れないと考えている (玉村 1986: 221)。

#### 3.1 「ちょうちょう」と「はなばな」の比較

日本語は、重複現象が顕著であり、その成分も音節、語幹、語などがあるが、その中で、玉村は、古代語の体言 (名詞・代名詞) を成分とする和語の疊語に焦点を当てて考察している。玉村 (1986: 222-223) は、最初に「てふてふ」と「はなばな」という興味深い疊語について論じている。漢語から日本語の単語となった古語「てふ」は、波行転呼現象<sup>3)</sup>で、/te + u/ になり、さらに、母音重複を避ける音韻変化作用により、/tjo:/ になった。今日の形に至る途中で、疊語形の「チョウチョウ」とその短縮形の「チョウチョ」が生まれた。このように、古語の「てふ」は近代語形として、「チョウ」「チョウチョウ」「チョウチョ」の三種あり、この例は新しい時代のものであるが、珍しいという。玉村は、平安中期に作られた辞書である 20 巻本『和名類聚鈔』の巻 19 の 31 部で「虫類」に属する掲出漢語の和名を調べ、1-2 拍語の虫の名詞が以下のように 14 語だけであり、これらに古い用例としての疊語が見られないと述べている。

(2) アブ カ ケラ シミ タニ ノミ ハチ  
ハブ ハヘ ハミ ヒキ ヒル ヘミ ムシ

次に「はなばな」であるが、最近では目に触れることがあるが、中古時代まではあまりないという。名詞の「花」が重複されることで多数性を指示する例は、2 例だけであるという。その内の 1 例は以下である。

(3) おるからにわかなはたちぬ女郎花  
いさおなしくははなはなにに見む  
(後撰和歌集巻第六 274)

一方で、「はなばなと」の形のように「と」を加えた形で副詞として用いられる例はやや多くあるという。この場合、「花」の属性概念の部分が重複によって強調されていて比喩表現に転じている。そのため、

「花」の実態概念は薄れている。玉村は例をあげていないため、『新全訳古語辞典』(2016)を参考にすると、「はなばなと(花々と・華々と)」は、「華やかに。はでに」の意味であり、次の例があげられている。

- (4) 「朝日のはなばなとさし上がるほどに」  
 (枕草子・関白殿, 二月二十一日に)  
 (訳: 朝日が華やかに射し上がるころに)

以上のように、玉村は「ちょうちょう」と「はなばな」を論じているが、意味にかんしては、この二語の違いについては言及していない。つまり「はなばな」が多数性を表すのに、「ちょうちょう」がそうでないという理由について論じていない。確かに、以下のように、現代語として「はな」は単数でも複数でも表すが、「はなばな」は複数の花のみを指す。しかし「ちょう」「ちょうちょ(う)」の両方の形は、単数と複数を表すことができる。

- (5) (i) 一本のはな / \*一本のはなばな  
 (ii) 多くのはな / 多くのはなばな  
 (iii) 一羽のちょう / 一羽のちょうちょ(う)  
 (iv) 多くのちょう / 多くのちょうちょ(う)

この違いは、古語で「はなばな」が僅かではあっても多様性を表す例が見つかったということが理由と考えてよいのだろうか。以下に紹介する玉村の調査で、「てふてふ」が含まれていないことから推測されうるが、もともと畳語として「ちょうちょう」という畳語は、いわゆるオノマトペの類に属するのではないだろうか。つまり、「ずきずき」「さらさら」のように音のみが重複し、語基の意味が重複によって影響されていない語と捉えてよいだろう。

筆者は、畳語ではないが「でんでんむし」と「きりぎりす」に音の重複があることに注目した。まず、蝸牛の異称の「でんでんむし」には、「でん」の反復がある。『広辞苑 第七版』によると、「出よ出よ虫」から「でむし」が成立し、それが「でんでん虫」になったとある。つまり、動詞の反復が含まれているので、複数を表すための繰り返しだとは想像でき

ない。一方、「きりぎりす」は、/k/-/g/の無声と有声としての対立があるが、最初の部分に /kiri/ と /giri/ の似た要素の繰り返しが見られる。『小学館精選版日本国語辞典』(2008)によると、雄は「チョン、ギース」と鳴くことから、泣き声から名付けられたかもしれない。そうすると「ちょうちょう」とは異なり、純粋なオノマトペの類の例である。「でんでんむし」と「きりぎりす」は、単数でも複数でも使えるので、その点では、両語とも「ちょうちょう」と同様の性質である。つまり、これら虫を表す語の音の反復は、複数のみ表現する「はなばな」とは一線を画すことになり、多数性を表すための機能は果たしていない。

### 3.2 古典作品の調査

玉村は、古語の名詞畳語を調査するために、3種類の本を参考にした。古典 14 作品を調べた『古典対照語い表』(宮島 1971)<sup>4)</sup>、『平家物語総索引』(金田一(他)(編)1973)、そして『今昔物語集自立語索引』(馬淵(監)有賀(編)1982)の16作品<sup>5)</sup>を選び、名詞と代名詞の畳語形を抽出した。成分は和語で、「きざみ」のような動詞の連用形からの転生名詞も含めた。しかし「よなよな」のように、「よな」に自立用法がないような場合は除いた。つまり、反復される部分が意味を示す語基であり単独で用いられるものに限定されている。

#### 3.2.1 調査結果

玉村(1986:224-227)は、この調査結果を整理して16作品中どこに何例用いられているか分かるような表を作成している。畳語形種類は、表1では96例、また表2は、付加されるべき参考例として8例を示し、総計104例を掲げている。表1と表2から、畳語のみを集めると以下ようになる。

- (6)

あたりあたり(辺)	あてあて(当当)
いへいへ	いまいま
いろいろ	うちうち(内)
うらうら(浦)	おのおの
	かずかず

かたがた (方) かみがみ きぎ  
 きざみきざみ (刻) きぬぎぬ (後朝)  
 きはぎは (際) きみきみ くさぐさ (種類)  
 くちぐち くにぐち くまぐま (隈) けふけふ  
 こころごころ こちごち (此方) ことごと (事)  
 これこれ (是) ころごろ (頃) こゑこゑ  
 さきざき (先) さきざき (崎) さとざと  
 さまざま しなじな (品) すぎすぎ (次次)  
 すちすち (筋) すゑすゑ (末) せぜ  
 そこそこ (其処) そばそば (側) それそれ (其)  
 たびたび たれたれ (誰) ちぢ  
 つかさつかさ (司) つきづき つぎつぎ (次)  
 つぼねつぼね つまづま (端端) つやつや  
 てらでら ところどころ としどし  
 とほみよみよ とまりとまり (泊) ともども  
 とりどり (取取) なかなか なぞなぞ  
 なぬかなぬか なみなみ (並並) のちのち  
 はしはし (端) はてはて (果) はなばな (花)  
 はらはら (腹) ひとつひとつ ひとつと  
 ひとりひとり ひび ひまひま (隙)  
 ふしぶし (節) へだてへだて (隔) ほかほか (外)  
 ほどほど まきまき (巻) まことまこと  
 まちまち (町) まちまち (区) まま (間間)  
 みみ (身身) みかどみかど みちみち  
 みつぎみつぎ (見継) みやみや みよみよ (御代)  
 むきむき (向) むらむら (斑斑) やまやま  
 ゆゑゆゑ (故) よすがよすが (縁) よひよひ  
 よよ (世) よるよる われわれ をりをり  
 あさなあさな もろもろ よなよな 在在所所  
 曹司曹司 雑雑 度度 念念

玉村の考察を紹介する前に、上のリストと、現代日本語との比較を試みる。田村 (1991) は、現代日本語の名詞・代名詞の疊語形を集めて紹介している。用例の中には、副詞化された例や、名詞か副詞か明確でない例も含まれるが、意味的には「場所性」、「時間性」、人体部位を含む「人間」を表すものが多いと述べている。また慣用句（「茶々を入れる」）としてだけでなく、比喩表現（「色々」「粉々」）に変化しているものもあると分析している。以下に収集

された疊語を示す (田村 1991: 43)。

(7)

「後々」「家々」「一々」「何時何時」  
 「疣疣 (いぼいぼ)」「色々」「内々」「各々」「折々」  
 「数々」「方々」「神々」「木々」「口々」「国々」  
 「声々」「戸々」「個々」「語々」「粉々」「これこれ」  
 「先々」「様々」「品々」「縞々」「島々」「下々」  
 「皺々」「順々」「末々」「隅々」「それぞれ」「代々」  
 「度々」「誰々」「段々」「茶々」「喋々」「月々」  
 「次々」「常々」「(お)手々」「点々」「時々」「共々」  
 「中々」「謎謎」「何々」「並々」「年々」「端々」  
 「花々」「半々」「一つ一つ」「人々」「一人一人」  
 「日々」「節々」「星々」「程々」「前々」「間々」  
 「道々」「峰々」「脈々」「村々」「銘々」「面々」  
 「元々」「山々」「碌々」etc.

次に、(6) と (7) のリストに共通する疊語を抜き出すと以下ようになる。

(8) 古代日本語文献と現代日本語に共通する疊語形：

「家々」「色々」「内々」「各々」「折々」「数々」  
 「方々」「神々」「木々」「口々」「国々」「声々」  
 「これこれ」「先々」「様々」「品々」「末々」  
 「それぞれ」「度々」「月々」「次々」  
 「ところどころ」「中々」「謎謎」「つやつや」  
 「寺々」「年々」「端々」「花々」「人々」「一人一人」  
 「日々」「節々」「程々」「道々」「山々」「われわれ」

古語のリストにある用例と半数以上が共通している。しかし、田村のリストは十分に網羅されておらず、「寺々」「ところどころ」「つやつや」「われわれ」など頻繁に使われる疊語などが見つからないので、筆者が上に書き入れた。次に、具象名詞に注目して、現代日本語 (田村のリスト) だけにある疊語形を書き出すと以下ようになる。

(9) 古代日本語文献にはない疊語形：

「疣疣(いぼいぼ)」「皺々」「島々」「蝶々」  
「星々」「峰々」「村々」

この中で、3.1 で見たように、「蝶々」は漢語の「てふ」から波行転呼現象を経て「ちょう」になり、それが近代語形の疊語形になったので、古代ではなく新しい時代になるまで存在しなかった。ただ、上で指摘した通り、「蝶々」は必ずしも多数を意味しない。「疣疣(いぼいぼ)」も『広辞苑 第七版』によると「多くのいぼ、またはいぼ状の突起物」であり、単数を示すこともある。そこで、これら2語は、他の例とは異なる性質であることに留意すべきである。さらに「皺々」は、『広辞苑 第七版』によると「しわだらけであるさま」を意味することから、形容動詞としての働きをし、いわゆる名詞として「\*私は、皺皺が多い」のような言い方は一般的にはしない。残りの「島々」「峰々」「村々」はどうであろうか。『広辞苑 第七版』によると、「島々」は、「多くの島。もろもろの島」とあるが、「星々」と「峰々」は掲載されていないことから、「島々」という疊語形が多数を表すために一般的に使われていることが分かる。確かに、「ここから、たくさんの島々が見えます」と言うことはあっても、「ここから、たくさんの星々(峰々)が見えます」という表現は、文章以外では普段は使わないだろうと思われる。この理由は、2.2 で紹介した國廣(1980)の〈個別性を保った不特定多数〉、また飯間(2003)が述べている「個性的」及び「独立的」であるかどうかを基準にして説明できる。つまり、「星」や「峰」は、個性が乏しく、没個性であるので、疊語としては周辺的な性質になる。しかし、「島」は独立性が高いので、典型的な疊語となることができのだろう。また、「道々」は、古代にも現代にもあるが、現代では、「道すがら」という意味の副詞用法であり、複数の意味には用いられない。しかし、古代語では「みちみち」は副詞用法だけでなく、複数も表した：〔(i) あちらこちらの道。(ii) 学問や芸能などのさまざまな方面、諸道(『旺文社全訳古語辞典 第四版』)〕。

このように、古代日本語文献にはない疊語形の中で、現代語で新たに用いられている疊語はあまり多

くないように推測される。逆に古代日本語文献にあっても、現代日本語では使われなくなった疊語があることに気づくべきである。例えば、現代語にはない疊語の「きみきみ」「せぜ」「はてはて」「はらはら」は、『旺文社全訳古語辞典 第四版』によるとそれぞれ、「君」の複数：この君かの君。主君たち、[多くの瀬、その時その時][果ての果て。とどのつまり]、[はらばら：一夫多妻で父を同じくする子供たちの母たち]である。さらに、「みかどみかど」「つぼねつぼね」「まきまき」も使われませんが、疊語の成分である語基「みかど」(宮殿/天皇など)、「つぼね」(部屋、女房など)「まき」(巻物になっている書画や書物)が使われなくなったために、疊語も使われなくなったのであろう。

### 3.2.2 調査結果の考察

玉村は、表1(玉村 1986: 224-226)で示された96例を対象として、調査結果を分析している。玉村は、疊語の基本となる語基を「成分」と呼んでいる。最初に、この「成分」を取り上げ、音的要素、使用頻度、意味的要素から考察している。次に、疊語が表す意味について詳細な分析を行なっている。以下、簡潔にその結果をまとめる。

#### 3.2.2.1 疊語形の成分

古代の和語名詞の疊語形の成分について、(i) 拍数 (ii) 基本度・使用頻度 (iii) 成分の意味分布という三項目について分析している。拍数について言うことは、大半が2拍名詞であるという点である。1拍は「きぎ(木々)」「せぜ(瀬々)」「ひび(日々)」「よよ(代々)」など僅かであり、3拍は「あたりあたり」「ところどころ」「ひとりひとり」「みかどみかど」など15語であるという。4拍の名詞は一語もないが、その理由として和語の基本語が1拍から3拍で構成され、4拍以上の語は複合語か派生語であり、基本的な語ではないことを挙げている。さらに疊語になった場合に8拍以上になり語形としては長すぎるため避けられたのではないかと述べている。

次に基本度であるが、『古典対照語い表』で対照された14作品全てに用いられている「成分」(語基)

は 31 語あり、調査で見つけられた全体数 96 語の 32.29%に相当する。<sup>6)</sup> これらを書き出すと以下のようなになる。

(10)

「あたりあたり (辺)」「いまいま」「うちうち」  
 「かずかず」「かたがた (方)」「くにくに」  
 「ころごころ」「ことごと (事)」「これこれ」  
 「ころごろ (頃)」「それぞれ (其れ)」  
 「たれたれ (誰)」「つきづき」「ときどき」  
 「ところどころ」「としどし」「なかなか」  
 「のちのち」「はなばな (花)」「ひとつひとつ」  
 「ひとびと」「ひとりひとり」「ひび」「ほどほど」  
 「まことまこと」「みみ (身身)」「みちみち」  
 「やまやま」「よよ (世)」「よるよる」「われわれ」

これらは、基本的な語基であるが、その中で、使用頻度が高い豊語の例は以下のようなものがある。

(11) ひとびと (1290) なかなか (395)

さまさま (349) おのおの (297)

ところどころ (197) ときどき (193)

をりおり (169) かたがた (162)

いろいろ (89) つぎつぎ (85)

上のカッコ内の数字から明らかなように、「ひとびと」が最も多い。これら高頻度豊語群は、意味・機能的には「人格性複数指示」か「副詞性」のどちらかに分類される傾向があると玉村は指摘している。「ひとびと」「かたがた」が前者の例で、「なかなか」「さまさま」が後者の例である。

最後に、成分の意味分布については、『古典対照語い表』を参考にし、14 作品に共通の 137 語の中で、64 の名詞を調べると、豊語が存在するのは、約半数の 31 語であること、特に、[とき][ところ][数量][人]の意味分野では 34 語中 22 語が豊語になることが観察され、高い割合であると述べている。これらの分野に集中していることを確認するために、表 1 全体の成分を 9 分野 ([抽象][とき][ところ][数

量][人][動作・精神][生産物][自然][生物])に分類している。玉村は、個々の成分を検討し、興味深い事象を順不同で挙げている(玉村 1986: 231-232)。以下、分かりやすくするために、筆者が並び替えて示すことにする。

(12)

(i) 人間・人体に関する名詞、人格・神格性  
の名詞が多い。

(ii) (ところ)の分野の中でも、地理・地形に  
関する名詞が多い。(しかし「やま」「くま」  
「みち」「うら」などはあるが、「かは」「と  
ほり」「うみ」「いけ」「ぬま」などはない。

(iii) 「ひ」「つき」「とし」「みよ」はそろっている。

(iv) 「いま」「さき」「のち」はそろっている。

(v) 「うち」と「なか」、「ほか」と「そば」がある。

(vi) 「こと」があって「もの」がない。

(vii) 「てら」があって「やしろ」がない。

(viii) 「これ」「それ」があって「かれ」「あれ」がない。

(ix) 「けふ」があって「あす」「きぞ」がない。

(x) 「すゑ」があって「もと」がない。

(xi) 「かみ」があって「ほどけ」がない。

(xii) 「よ」「よひ」「よる」はあるが、「あさ」「ひる」  
はない。

(xiii) 「いろ」「つや」「さま」はあるが、「かた」「かた  
ち」「か」「かをり」「にほひ」「おと」「ね」「ひか  
り」「かげ」などはない。

(xiv) 「き」「くさ」「はな」などはあるが、「ね」「め」  
「は」「え(だ)」などはなく、ヒト以外の動物、  
例えば、「け(だ)もの」「うし」「むし」「てふ」  
「とり」「たか」などはない。

(12i-ii) から、人、神、地理、地形の名詞が多いことが分かる。またの(12iii-v)は、時間と場所を表す名詞で揃っている例であるが、(12vi)以降は、すべて揃っていない名詞について言及している。例えば、「神々」「寺々」はあっても、「\*仏々」「\*社々(やし  
ろやしろ)」はないが、それは何故なのだろうか。玉村はこの問いには答えていない。揃っていない例が多いということは、豊語になれる要素が足りない

ということであり、畳語になる可能性が低いということであろう。つまり畳語になるためには、名詞の意味に何らかの条件が必要であり、単に複数を表すというために畳語があるわけではないことが明らかである。例えば、「神々」「寺々」は、それぞれ個性的で、不特定多数あることが想像しやすいが、「\*仏々」は没個性的であり、「\*社々」は、建築方式がある程度決まっているので、寺ほど個性的ではない、など、畳語になる条件が満たされていないと考えることができる。

### 3.2.2.2 畳語の意味

次に、玉村は、重複形の畳語が表す意味について考察している。まず畳語化により、「数」にかんして、無標状態から有標に転ずることが多いと指摘している。例えば、「ところ」→「ところどころ」「やま」→「やまやま」などのように古代の和語名詞の畳語形の9割弱は複数化される傾向があると主張している。一方で、表1の96の畳語形の中で、以下の11項目は、明瞭な複数性が認識されにくいと述べている。

- (13) 「うちうち」「けふけふ」「ころごろ」「さきざき」  
 「つやつや」「ともども」「なぞなぞ」「なみなみ」  
 「のちのち」「まことまこと」「むらむら」

上の畳語は、副詞性語群に属すると考え、「数」ではなく「量」としての増幅強調がされていると捉えるべきだと提案している。つまり「けふけふ」「これこれ」「なぞなぞ」「まことまこと」は現実の発話や歌などで用いられる畳語形で、反復による強調形と捉えている。

ところで、玉村は、複数性が認められる畳語形で、副詞の働きをするようになった例を挙げている。まず、「なかなか」は、「中」という〔ところ〕に属する名詞が成分であるが、「言及するのち返って愚かなほど明白に」の意味から、「無論/すこぶる」のような意味に発展している。次に「きぬぎぬ」は、「着物」の複数の意味が基本にあり、「男女共寝の翌朝、各自の衣を着て別れること」を表すと考えている。<sup>7)</sup>

筆者には、「なかなか」と「きぬぎぬ」は典型的

な畳語ではないと思われる。『旺文社全訳古語辞典 第四版』を参考にすると、「なか」は、「内部、中央」などの意味であるが、「なかなか」は、形容動詞では「中途半端なさま、生半可だ」副詞として「なまじっか、かえってむしろ」である。玉村の呼ぶ「成分」の意味と畳語化された語との間に意味の関連性がみられない。また、「きぬ」は、「衣服」を表すが、「きぬぎぬ」は、いくら複数の衣服が暗示されたと言っても、「男女共寝の翌朝、各自の衣を着て別れること」を表し、衣服の意味からかなり離れた意味で、例えば、「ひと」と「ひとびと」の関係とはかなりの隔たりが見られる。故にこれらの例は、語基(=成分)と畳語との間に関連性が見られないために、本稿で取り扱うべき畳語ではないと思われる。畳語の意味が語基の意味から離れすぎてしまい、その関係が不透明になってしまっている例である。このような場合、frozen form として捉え、反復された形ではあるが、畳語としてではなく、別個の語として扱うべきであろう。

玉村は、畳語形の意味を「複数性」と「その他」に分けている。「複数性」については、中世までの語義を調べた結果が以下のように分類されている(玉村 1986: 234-235)。複数項目に表れている畳語形には、下線が施されている。

- (14)
- (i) 「個別指示」(毎~, 各~, ~ごと)
- あてあて 家々 おのおの かずかず  
 きはぎは 国々 心々 それぞれ 月々  
 時々 所々 年々 とりどり 七日七日  
腹々 ひとつひとつ ひとりひとり  
 日々 ふしぶし ほかほか ほどほど 巻々  
 区々 みみ 道道 むきむき  
 よすがよすが よひよひ 代々 よるよる  
 をりをり
- (ii) 「複数指示」(2つ以上の~)
- あたりあたり かたがた 木々 きぎみきぎみ  
 衣々 君々 国々 隈々  
 こちごち ことごと これこれ さとざと  
様々 品々 すぎすぎ 末々



そばそば それぞれ つかさつかさ 次々  
 局々 つまづま 寺々 所々  
 とまりとまり はしばし ひまひま  
ふしぶし へだてへだて ほどほど 巻々  
みみ みかどみかど みちみち 山々  
よるよる われわれ

(iii) 「多数指示」(多くの～)

家々 色々 浦々 神々 木々 種々 口々  
国々 崎々 様々 品々 筋々 瀬々  
 そこそこ たびたび 寺々 所々 花々  
 みよみよ 腹々 人々 町々 宮々 村々  
山々 代々

(iv) 「総数指示」(すべての～)

該当例なし

玉村は、複数の意味が表れる例を以上のように4分類しているが、(14i)の「個別指示」は、副詞用法であると考えてよいだろう。(14iv)「総数指示」の例がないので、品詞が変わらずに意味だけの変化が見られるのは、(14ii)「複数指示」と(14iii)「多数指示」だけである。意味は、「2つ以上の～」と「多くの」と書かれているが、実例がないので、複数と多数の違いが分かりづらい。「多数」はいくつ以上のことを指すのであろうか。また「複数指示」の例で「2つ」を示すことがあるのかどうかなど、明らかでない点が多い。

次に、「その他」の意味については、数に関連がないもので、以下のように3分類されているが、これらに属する用例は「副詞」としての性質が濃いつい。

- (15) (i) 単純強調：あとあと いまいま  
 (ii) 量的強調：つやつや 道々 山々  
 (iii) 臙化・不定性：そこそこ たれたれ

意味にかんして分類し、その特徴から観察される点を以下の5点をあげている。

- (16) (i) 多くの畳語形の指示内容が2項目以上にわたること

- (ii) 時間性名詞の畳語形は個別指示の傾向が強いこと  
 (iii) 16作品の用例としては、総数指示に関わる畳語形が見られないこと  
 (iv) 種類の多様性を表す畳語形が相対的に多いとみられること  
 (v) 形容動詞や副詞に転じるものが少なくないこと

これらの特徴から、玉村は、古代の和語名詞の畳語形における基本的な働きを考察している。数的概念の点から検討して二通りの解釈を提示している。即ち、個別のモノ／コトを示して、その累積を表す場合（「一つ一つの～」 「～ごと」）と、二つ以上のモノ／コトを表すことで、「あの～、この～」 「いろいろな～」 やその延長として「多くの～」を意味したと仮定し、次のように主張している。

…この個別指示と複数ないしは多数の指示が、「家々」や「所々」に見られるように、同一語形において、両立しているところから、この畳語の最も基本的な働きが、個物・個事象に払われた重大な関心の同種の他の個物・個事象への移動を表すこと、さらにその個物・個事象への関心が複数ないしは多数の表象に展開するところにあったと考えられるのである。(玉村 1986: 236)

換言すると、玉村は、畳語形が「個性・価値ある個を包含した複個数」を意味すると考えている。従って、最も典型的な畳語形である「人々」は「性質や年齢などが異なるあの人、この人」、「山々」は「高さや形などが異なるあの山、この山」と理解されるのである。その理由から、没個性的な「虫」や「牛」などには畳語形が存在しない。例外的に「花々」のような珍しい例もある。最後に、時間性名詞にかんしては、本来数える事に結びついているので、「毎日」「毎月」「毎年」のように個別指示機能に適合しやすいと説明している。

## 3.3 まとめ

玉村(1986: 237)は、最後に古代日本語の畳語形の考察で観察された要点を次の6点にまとめている。

- (17) (i) 畳語形式をもつ名詞は基本的な語で、使用頻度の高いものであり、地理・地形に関するものを筆頭とする場所性名詞が多い。その余の名詞も、時間・神・人などに関するもの、および種類を指すものであって、意味分野ではかなりの偏りが見られる。
- (ii) 価値なきもの、卑小なものを指す名詞には畳語形式が見当たらない。
- (iii) 三拍以上の語には畳語形式が造りにくい。
- (iv) 複数を表す場合は、単なる2以上を表す場合とかなりの多数を表す場合とに分かれるが、いずれにしても、個性を残しつつその類の多数を表す複個数を表象していると考えられ。
- (v) 同類のすべてを表す総数は、古代の例としては見られない。
- (vi) 以上から、「日本語には名詞の複数を表す手続きに畳語形式がある」という記述は、「日本語の畳語形式によって複数を表すものがある」というふうに訂正しなければならない。

以上の玉村のまとめを畳語の形と意味について分けて考えると、意味にかかわらず、三拍以上は畳語になりにくいということから、畳語の成立には、音韻的な制約があることが分かる。意味的には、価値なきもの、卑小なもの以外で、場所性名詞、時間・神・人などに偏っている。玉村が(17iv)で述べていることにかんして、3.2.2.2でも指摘したように、数の差が明確ではない。2以上を表す場合と多数の具体的な数が書かれていない。(17v)で「総数」の例が見られなかったとあるが、2.2で述べた様に、『日本語学大辞典』(2018)には「総数」[例「国々の防人集さきもりつどひ…」(万葉集 4381)]の意味があったと記されている。さらに、(17vi)「日本語の畳語形式に

よって複数を表すものがある」の中の「複数」を、國廣(1980)が提言した〈個別性を保った不特定多数〉に置き換えることができるのではないかとも思われる。

## 4. 考察：畳語形と類像性

畳語形が表す主要な意味である「複数性」と「多様性」に関して、類像性との関連から考えていきたい。最初に複数性における「2」について論じる。次に、畳語形に伴う連濁と「多様性」について類像性の観点から検討する。

## 4.1 畳語形と「2」

畳語名詞が表すもの(こと)の数に関して、以下の4つの可能性が考えられる。

- (18)(i) 名詞の示すもの(こと)が二つある。
- (ii) 名詞の示すもの(こと)が複数ある(二つ以上ある)。
- (iii) 名詞の示すもの(こと)が、少数ではなく多数ある。
- (iv) 名詞の示すもの(こと)が多数あり、それらが一まとまりになり、全体として存在する。

これまで検討した結果、(18iv)の例はないとは言えないだろうが、主要な意味ではないようである。そこで、その他の可能性についてはどうであろうか。まず、(18ii)と(18iii)の相違点については、玉村も國廣も明らかにしていない。しかし、(18i)については、筆者が興味深い畳語を発見した。それは「みみ(身身)」である。『旺文社全訳古語辞典 第四版』(2014)によると、この意味は、次の2つである。

- (19)(i) それぞれの身。その身その身。各人。  
 [源氏]蓬生『おのが——につけたるたよりも、思ひ出でて』[訳：自分のその身その身に応じたあれこれの縁故関係を思い出して。]
- (ii) (多く、「身身となる」の形で)身二つにな

ること。子を産むこと。

**平家** 九・小宰相身投「しづかに——となつてのち、幼き者をも育てて」

[訳:無事に(子供を産んで)身二つとなつてのち、(産んだその)幼い者をも育てて。]

一方、『新全訳古語辞典』(2016)の説明は、以下のように簡潔である。

(20)(i) その身その身。各人の身。

(ii) [「身身となる」の形で] 出産すること。身ふたつ。

これらの訳から、二つの意味があり、一つは、「それぞれの」ということであるが、もう一つの意味が「身二つになること」であり、複数を表すとしても、「2」を意味することから、まさしく‘iconic(類像的)’である。疊語は、語が反復されることで複数を示すことから、同音の繰り返し、意味に写像されると捉えられるのであるが、名詞の表すモノ(或いは、コト)が二つであると意味されるのであれば、典型的な類像と考えられる。さらに、清海(2020:13)でみた例(某区保健所の担当者がコロナウイルスの感染の可能性についての発言)を次にあげる。

(21)「水面下で ひとひと で移しているのではないか …」

上の文では、下線部分が「個別に人から人へ」(二人以上の人々)の意味で用いられているか、または、「一人と一人」(二人だけ)を指す可能性も考えられる。後者の場合は「みみ(身身)」と同様に、2以上の複数ではなく「2」を表すことになる。

#### 4.2 疊語形と連濁音

『日本語百科大事典 縮刷版』(1995:443)は、疊語と「ワンワン、キャーキャー、ゴクゴク、ザーザー」などの擬音語、「キラキラ、キョロキョロ、ノソノソ、ニヤニヤ、ドキドキ」などの擬態語との違いを、2拍の語幹を重ねる疊語の例で説明してい

る。擬音語・擬態語から除外されるべき疊語の例として示されているのは以下である。

(22) 名詞: みちみち (道) 話しながらきた、しわしわ (皺) になる

動詞連用形: ありあり (ある) と思ひ出す、

すけすけ (透ける) になる

形容詞語幹: しぶしぶ (渋い) 承知する、

ひそひそ (ひそかな) 耳打ちする

副詞: まざまざ ひと安心

上の例では、アクセントが擬音語・擬態語のように頭高型でないことに注目すべきだと指摘されている。また、疊語の特徴として、連濁が多く観察されることが述べられている(例:「きれぎれに語る」「ひろびろと広がる」「つねづね考えていた」)。これらの点で、疊語と擬音語・擬態語が区別できると説明されている。

連濁とは、「カ行」「サ行」「タ行」「ハ行」が有声音化されることで、有声音である母音の「ア行」、鼻音の「ナ行」と「マ行」、また半母音の「ヤ行」には変化が起こらない。玉村のリストを調べると、「カ行」「サ行」「タ行」「ハ行」で始まる疊語は、61語あり、その中で、連濁が起きているのは、33例であった。つまり、「カ行」「サ行」「タ行」「ハ行」の54.09%の疊語に連濁が生じている。このように半数以上の疊語に連濁が見られるのは、疊語の特徴である。この特徴は、類像性と関連があるのではないだろうか。無声音と有声音の4種類の対立(/k/-/g/, /s/-/z/, /t/-/d/, /h/-/b/)に、意味に於ける[多様性]の類像的有契性(motivations)<sup>9)</sup>が存在すると考えることは適切であるだろう。換言すると、音の変化が「多様であること」を象徴的に暗示していると仮定する。分かりやすい例として、「せぜ」と「ふ：ぶ」を以下に取り上げることにする。「せ：ぜ」と「ふ：ぶ」という無声音と有声音の対立が象徴的に「さまざま～」を含意していると考えれば、単なる「不特定多数の～」ではなく、「あちこちの～」を表現すると捉えることが自然になる。

\*「川川」はないが、川の部分を表す「せぜ」がある。

現代語では、使われないが何故であろうか。「瀬」は、『広辞苑 第七版』では、[(i) 川など浅くて徒歩で渡れるところ、あさせ。(ii) 水流の急なところ。はやせ。(iii) (渡るための狭い所の意から事に出あう時／その場所／点。ふし)] という意味がある。また、『旺文社全訳古語辞典 第四版』の「せぜ」をみると、[(i) 多くの瀬。あちこちの瀬。あの瀬この瀬 (ii) その時その時。おりおり] のように、多数を表現し、また時間を表す副詞としての役割もみられる。次にあげる百人一首にある権中納言定頼(藤原定頼)の歌(千載集)を見ることにしよう。

- (23) 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらは  
れわたる 瀬々の網代木

『新全訳古語辞典』の訳は、「ほのぼのと夜の明けるとき、宇治川にたちこめていた川霧がとぎれとぎれに消えて、その間からだんだん見えてくるあちこちの瀬に置かれてある網代木よ」である。「\*川々」が言えないのは、川全体を見る事ができないからであって、川の部分の「瀬」は独立性があり、畳語として成り立つのであろう。しかし、現代日本語では魚を撮る仕掛けの杭である「網代木」が使われなくなったこともあり、それが打ち込まれていた場所の「瀬々」も注目されなくなり使われなくなったと考えられる。

次に取り上げる例は、古代語から現代語で少し意味変化が生じている「ふしぶし」である。『広辞苑 第七版』では、以下の意味が与えられている。

- (24)(i) おりおり。その時どき。源氏物語(桐壺)。  
「ゆゑあることの―には、まづ参(ま)うのぼ  
らせ給ひ」  
(ii) 身体の方々の関節。「―が痛む」  
(iii) いろいろな箇所。事々。「疑わしい―をた  
だす」

(24)の3つの意味で、「体の方々の関節」の意味は後に生まれたのであろう。古語としての「ふしぶし」の意味は、『旺文社全訳古語辞典 第四版』による

と、[(i) あれこれ。ところどころ。(ii) おりおり]の2種類である。現代日本語では、「節々が痛い/重い」という表現は、「あちこちの関節が痛い/重い」を意味するために用いる。古語の意味に、「あれこれ、ところどころ」の意味があることから、この畳語は、単なる複数または、多数というより、「さまざまな」コトやトコロを表していたと想像できる。元来「さまざまな場所」を表現して、その後、「あちこちの関節」を意味するようになったと推測できる。

以上、「せぜ」「ふしぶし」の二例から、畳語形の連濁音が「多様であること」を象徴的に暗示していることを示した。畳語形に連濁音が多く用いられていることに注目し、意味との関連性を探った。即ち、無声音と有声音の対立(/k-/g/, /s-/z/, /t-/d/, /h-/b/)が象徴的に「さまざまな～」や「あちこちの～」を含意しているのではないかと提案した。

## 5. 類型論から名詞畳語を考える

最後に、類型論の視点から日本語における名詞の畳語を検討する。参考にする研究は、Kiyomi (1993)で、5つの語族で、総数89の言語を対象にし、系統立ったデータを集めている。<sup>9)</sup> バンツー語族から18言語、オーストラリア語族から20言語、またパプア語族から14言語である。以下、名詞に関するデータを紹介する。意味のすぐ横の括弧内の数字はデータの中でその例がある言語の数を示している。

### 5.1 意味の種類

全部で19種類の意味が認められた。そのうち13種類が次の3種類の意味タイプに還元されると考えた。

- (25) 複数化 [60] 弱小化 [12] 強化 [11]

複数化を表す例の多さは顕著であり、名詞畳語形の3例に2例は、何らかの意味で「複数」に関連するといえる。さらに、興味深いことに、弱小化とその逆の強化の例がほとんど同数に近かった。以下、下位の意味を扱いながら簡潔に意味タイプを紹介する。

5.2 タイプ1:「複数化」

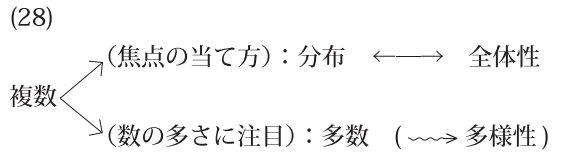
この意味には、7種類の下位の意味が含まれる。  
頻度が多い順に並べると次のようになる。

- (26)「複数」[26],「分布(それぞれの～)」[17],  
「全体性(すべての～)」[7],  
「多数(多くの～)」[6],  
「多様性(いろいろな～)」[2]  
「相互関係(お互いに～)」[1],  
「反復/継続(繰り返された～)」[1]

上位4種類の意味の用例は以下のようになる。

- (27)「複数」[26]:  
例 srey「女性」 srey-srey「女性達」  
(カンボジア語:オーストロアジア)  
「分布」[17]:  
例 baláy「家」 baláy-baláy「それぞれの家」  
(ヒリガイノン語:マライ・ポリネシア)  
「全体性」[7]:  
例 nyama「動物」  
nyama-nyama「すべての動物」  
(ンデンゲーゼ語:バンツー)  
「多数」[6]:  
例 li-fate「木」 li-fate-fate「多数の木」  
(南ソトホ語:バンツー)

上の意味の中で、「複数」「分布」「全体」「多数」「多様性」に関連性があると考えられる。用例が最も多かった「複数」を基本的意味だと仮定する。もし、複数の一つ一つに焦点が当てられると「分布」を表し、複数全体に焦点を向けられると「全体性」を意味する。一方で、複数にかんして多さに注目されると「多数」が意味される。さらに多数が異なる性質から成立する場合、「多様性」を表すと想像できる。これらの関係を図で示すと以下のようになる。



5.3 タイプ2:「弱小化」

弱小化の下位の意味は、3種類あり、語基の意味の寸法が縮小されたり、弱められたりする性質を共有している。用例は多い順に、「模造品(人形の～)」[7],「縮小化(小さい～)」[4],「通常(普通の～)」[1]がある。以下に用例をあげる。

- (29)「模造品」[7]:  
例 baláy「家」 baláy-baláy「人形の家」  
(ヒリガイノン語:マライ・ポリネシア)  
「縮小化」[4]:  
例 kanku「少年」  
kanku-kanku「小さい少年」  
(ディヤリ語:オーストラリア)  
「通常」[1]:  
例 musóro「頭」  
musóro-sóro「才能のない単なる頭」  
(シヨナ語:バンツー)

5.4 タイプ3:「強化」

「強化」には、「強化」「唯一」「強調」という3種類の下位の意味がある。「強化」が名詞のもつ属性を強めている一方で、「強調」は「本当の～」「真正銘の～」という意味を表すと考える。以下が用例である。

- (30)「強化」[4]:  
例 lupéngo「いい匂い」  
lu-péngo-péngo「とてもいい匂い」  
(ルバレ語:バンツー)  
「唯一」[4]:  
例 siak「私」 sí-siak「私だけ」  
(イロカノ語:マライ・ポリネシア)

「強調」[3]:

例 mwa-múna「男性 / 夫 (mwa= 接頭辞)」  
 mwa-múna-múna「正真正銘の 男性 / 夫」  
 (チチュワ語: バンツー)

### 5.5 「サイズ」と「数」の関係

上記に含まれない, 類似 [4], 具体性 [1], 良さ [1], 特定 [1], 曖昧さ [1], 売り主 [1] の 6 種類の意味も見つかった。以上のデータから言えることは, 名詞の反復が「小ささ」を表現しても「大きさ」は表わさないことが分かる。畳語では, 語基が意味するものより小さいものを意味する例が多数観察されている。つまり畳語は, サイズに関しては「小ささ」だけに関連し, 大きさには無関係である。下の図は, 「サイズ」と「数」に関して, 非対称的な関係があることを示している。

(31) サイズ	——	小さい	大きい
数	——	少ない	多い

### 5.6 日本語における畳語との比較

以上, Kiyomi (1993) のデータから, 名詞の反復で表現される意味特徴をみた。次に日本語における名詞の畳語の意味と照らし合わせてみよう。玉村が (14) で論じているように, 古代日本語の畳語で表される意味の複数性は次の 3 種類である: (i) 「個別指示」(毎~, 各~, ~ごと) (ii) 「複数指示」(2つ以上の~) (iii) 「多数指示」(多くの~)。さらに, 数に関連がない用例は「副詞」としての性質が濃い「強調」と「臙化・不定性」である。まず, 複数性にかんしては, 上で見た, タイプ 1 の「複数」「分布」「多数」に相当する。また, 「強調」は, タイプ 3 の「強化」であり, 「臙化・不定性」はその他の「曖昧さ」の例とみなされる。さらに, 國廣 (1980) の唱える〈個別性を保った不特定多数〉は, タイプ 1 の「多様性」と同等であると思われる。また, 限定的な構成法「XX する」(例「子供子供した」) は, [典型的な X の属性をもっている] を表すので, タイプ 3 の「強調」の例と考える。また 2.2 で見たように『日本語学大辞典』(蜂矢, 2018: 511) は, 万葉集の「国々」を「総数」とみなしているが, 上の分類ではタイプ

1 の「全体性」に相当する。このように, 日本語の名詞の畳語形は, 時代を通して, 言語に共通する意味特徴の多くを共有することが分かった。しかしながら, タイプ 2 「弱小化」の意味の用例は見つからなかった。

## 6. 結論

本稿では, 古代日本語と現代日本語に於ける畳語の意味を比較し, 現代語の畳語用法を確認した。今回, 古代日本語について参考にした玉村 (1986) は, 古典の代表作品を調査し, 古代語における和語の体言の畳語について考察している。2 節では, 畳語の定義を示した後, 現代日本語にかんする名詞の畳語形が表す意味を提示した。また最も説得力のある説明は, 國廣の提言する〈個別性を保った不特定多数〉である。3 節では, 玉村 (1986) が論じる古代語で体言を語基とする畳語形の研究を取り上げた。現代日本語と比較することで, 古代日本語文献に現れていない畳語形で, 現代語で新たに用いられている畳語の数が多いことが推測された。また, 「複数」と「多数」の違いが明確でない点も指摘された。4 節は, 「複数性」と「多様性」に関して, 類像性との関連から考察した。第一に, 複数性における「2」を表す可能性について用例をあげて論じた。また畳語形に伴う連濁において有声音と無声音の対立が「多様性」を象徴的に暗示していると捉え, 類像性が認められることを提示した。5 節では, 類型論の視点から日本語における名詞の畳語を Kiyomi (1993) を参考に検討した。その結果, 日本語の名詞の畳語形は, 時代を通して, 「弱小化」以外の意味特徴の多くを他言語と共有することが分かった。

### 注

- 1) 玉村 (1986: 237) は, 注で, 「総数」が「全数」と称されることもあり, ある種属全体を表す概念であると説明している
- 2) 矢島 (1983) によると, 古代メソポタミア諸語を学習していた時, シュメール語 (古代シュメール人によって紀元前から 8 世紀ごろまで用いられた言語) における畳語 'kur-kur' 「国々」が印象的で

あったという。この畳語にかんして、Jestin (1951) から次を引用している。

‘… le pluriel archaïque se formait par reduplication: zú-zú «dents», bár-bár «sanctuaires», il a pris progressivement une valeur de totalité : kur-kur 《tous les pays》

(拙訳:古代の複数は, zú-zú「歯」, bár-bár「神殿」のように, 重複して形成され, 徐々に kur-kur「全国」のように「全体」を表すようになってきた)

つまり, 畳語は元来「複数」を意味し, その後「全体」を表現したと考えられる。

- 3) 玉村 (1986: 222) は, 「波行転呼」としているが, 「ハ行転呼」とカタカナで表されることが多いようである。『広辞苑 第七版』(電子版)によると, 「ハ行転呼音」は, 「歴史的仮名遣のハ行の仮名が, 語中・語尾でワ行音に発音されること。またその音。11世紀頃から語中・語尾のハ行音がワ行音化し, ついで鎌倉初期にそのワ行音がア行音化した。「かは (川)」をカワ, 「かひ (貝)」をカイと発音する類」である。
- 4) 宮島 (1971) のまえがきに, 14 作品は「万葉集, 竹取物語, 伊勢物語, 古今和歌集, 土佐日記, 後撰和歌集, かげろふ日記, 枕草子, 源氏物語, 紫式部日記, 更科日記, 大鏡, 方丈記, 徒然草」であると記されている。
- 5) 以下に 16 作品名を以下にあげる。  
徒然草 方丈記 大鏡 更級日記 紫式部日記  
源氏物語 枕草子 蜻蛉日記 後撰集 土佐日記  
古今集 伊勢物語 竹取物語 万葉集  
平家物語 今昔物語集
- 6) 玉村 (1986: 228) は, 合計で 25 語であると書いてあるが, 実際には 31 語ある。
- 7) 『旺文社全訳古語辞典 第四版』(2014)によると, 「きぬぎぬ」の意味は「男女が二人の着物を重ねかけて共に寝た翌朝, それぞれの着物を着て別れること。またその朝」である。
- 8) 「類像的有契性」(motivations) は, Murphy and Koskela(2010) *Key Terms in Semantics* の邦訳『意味論 キーターム事典』で用いられている。

9) Kiyomi(1993)に基づいて論じている 清海(2001)も参考にしている。

#### 参考文献

- 飯間浩明 2003.『遊ぶ日本語 不思議な日本語』(岩波アクティブ新書 75), 岩波書店, 東京.
- 梅林博人 2005.「畳語形の使用について -- 「歌々」を例にして」『成城芸芸』192: 37-47.
- 清海節子 2001.「反復語の機能的特徴」『駿河台大学論叢』23: 77-100.
- 清海節子 2020.「日本語の畳語 —名詞の畳語が表現する意味の可能性—」『駿河台大学論叢』60: 13-27.
- 金田一春彦・清水功・近藤政美(編) 1973.『平家物語総索引』学習研究社, 東京.
- 國廣哲彌 1980.「総説」國廣哲彌(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店, 1-22.
- 玉村文郎 1986.「古代における和語名詞の畳語について」『論集 日本語研究(二) 歴史編』明治書院, 220-238.
- 田村泰男 1991.「現代日本語における畳語について —数概念からみた畳語—」『広島大学留学生センター紀要』1: 41-47.
- 馬淵和夫(監修)有賀嘉寿子(編) 1982.『今昔物語集自立語索引』(笠間索引叢刊)笠間書院, 東京.
- 宮島達夫(編) 1971.『古典対照語い表』(笠間索引叢刊 <4>)笠間書院, 東京.
- 矢島文夫 1983.「言語類型学の一指標としての畳語」『言語研究』84: 218-220.
- Jestin Raymond. 1951. *Abrégé de Grammaire Sumérienne*. (=Collection Georges Ort-Geuthner). Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris.
- Kiyomi Setsuko. 1993. A typological study of reduplication as morph-semantic process: evidence from five language families. Unpublished Ph.D. dissertation. Indiana University.
- Kiyomi Setsuko. 1995. A new approach to reduplication: a semantic study of noun and verb reduplication in the Malayo-Polynesian languages. *Linguistics* 33. 1145-1167.

辞典

- 荒木一郎(編) 1999.『英語学用語辞典』三省堂.
- 金田一春彦・林大・柴田武(編) 1995.『日本語百科大事典 縮刷版』大修館書店.
- 小学館国語辞典編集部(編) 2008.『小学館精選版 日本国語辞典』(電子版) 小学館.
- 新村出(編) 2018.『広辞苑 第七版』(電子版) 岩波書店.
- 蜂矢真郷 2018.「畳語」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, 511.
- 林巨樹・安藤千鶴子(編) 2016.『新全訳古語辞典』大修館書店.
- 宮腰賢・石井正己・小田勝(編) 2014.『旺文社全訳古語辞典 第四版』旺文社.
- Murphy Lynne M. and Anu Koskela. 2010. *Key Terms in Semantics*. London: Continuum International Publishing Group. (今井邦彦(監訳) 岡田・井門・松崎(訳) 2015.『意味論 キーターム事典』開拓社)